

ホタテガイの垂下水深と稚貝の生き残り

田中 俊輔・須川 人志・佐藤 恭成・蛭名 政仁・相坂 幸二

はじめに

本年夏の稚貝へい死に際し、上磯地区管内の稚貝を調査したところ、ホタテガイの垂下水深によって稚貝のへい死に差がみられたのでその概要を報告する。

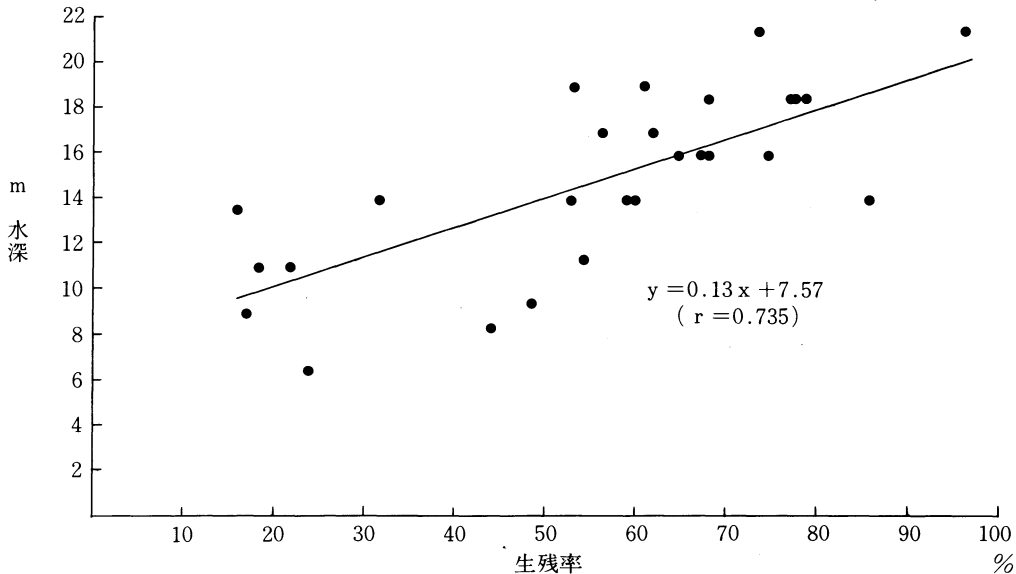
方 法

- 1) 調査期間：9月13日
- 2) 調査場所：平館村（3点）、蟹田町（3点）、蓬田村（1点）、青森市後潟（2点）
- 3) 調査方法：各漁協の異なる地区から1-3連のパールネットを当所に運搬し、上段、中段、下段のへい死状況を調査した。なお、パールネット上段は「幹網水深+2.0m」、中段は「幹網水深+4.0m」、下段は「幹網水深+6.5m」に設置されているものとした。

結果の概要

各調査点のパールネットの設置水深と収容した稚貝の生残率を第1図に示す。

第1図に示したようにパールネットの設置水深と生残率の関係は $y=0.13x+7.57$ ($r=0.735$) であった。このことから高水温に晒される夏季においては稚貝を深く垂下することが稚貝の養殖管理上有効であるものと思われる。なお、本調査は異なる漁業者、海域の稚貝を対象にして行ったので供試貝の経歴や養殖管理方法が同一とはいえないので今後も引き続き検討を行いたい。



第1図 パールネットの設置水深と収容した稚貝の生残率